



「自分とは異なる存在である」ことを認め合う

園長 野中 泉

先日あった今年度2回目の父親懇談会のことです。クラスごちゃ混ぜの3つのグループに分かれた懇談は、くじ引きでのテーマトークで進められたのですが、「他の人に聞いてみたいこと」というカードを引いたあるお父さんがこんなことを聞きました。「嫁さんが、(こちらは)なんの身に覚えもないのに、すごい勢いでガチャガチャと明らかに不機嫌そうな音をたててお皿を洗ってるときってあるじゃないですか。あの時は、声かけるのが正解ですか？それともそっとしておくのが正解ですかね」

その場にいたお父さんたちは、ここぞとばかりに「ある、ある！」「あれは、むずいよな」と共感の嵐。実際嫁さんの立場での正解は何？と問われた同世代の保育士（嫁さん側）がうんと悩んだ末に「声かけてくれなくて知らん顔も嫌やけど、見当違いのこと言われたら、余計腹立つわ」と言うと「あ～、もうお手上げやあ。難しすぎる」と天井を見上げるお父さんたち。その様子にみんなで大爆笑となりました。父親懇談会ならではのこんな男の井戸端会議は面白いなと思ったのですが、改めて「こんなにも、奥さんの気持ちがわかんないものなんだな」とも、今更ながらに思ってしまいました。

全然別の日のことですが、あるお母さんの愚痴を聞きました。ちょっと疲れて沈んでいるように見えた彼女に、私が「大丈夫？ いけてる？」と声をかけたことで、堰を切ったかのようにあふれだした若い彼女の愚痴はこんな話でした。

「私も仕事から帰ってクタクタなのに、昨日はご飯の時から下の子（2歳児）がずっとぐずぐず言って1時間以上ご飯食べさせるのにかかる。お風呂入れて、寝かしてっていう間も全部機嫌が悪くて、寝かすのにもめちゃくちゃ時間がかかる。やっと寝たと思って12時近くに下に降りたら台所の洗い物がグチャグチャでいっぱいに残ってるのに、旦那はソファーでゲームしてたんですよ。しようがないから洗い物しようと思ったんだけど、なんかもう涙が出てきて、泣きながら洗ってたら旦那が『何泣いてんの？』って言ってきて、でも、もうこっちは、どこから説明すればいいかわかんないよって気持ちで「もう、いい」って言ったら『ちゃんと、理由を言わないところは、わかんないだろ』って息子に諭すみたいに上から言われて、もう、ほんとに、なんでこんなにわかんないだろうって情けなく、なっちゃって」。どうですか？ 父懇ではないけれど、きっとこれを読みながら「わかる、わかる」「うちも一緒だよ～」と頷く、お母さんたちの共感の嵐が見える気がします。

誤解しないでほしいのですが、私は、お父さん側、お母さん側のどちらにも「相手の気持ちを理解しなさい」とお説教したいわけではないのです。人を理解すること—これは誰にとっても人生の中で最も奥深く、時に困難なテーマです。多くの人が「他人の気持ちを理解しなさい」という教えを受けて育ちます。でも、実際には、自分と相手の気持ちや価値観が完全に一致することはなく、理解しがたいのです。残念ながら、愛し合う恋人同士でも夫婦でも、それはそうです。

では、理解できないからあきらめろと言いたいのか。それも、違います。相手のすべてを理解しようとするのは不可能であっても、理解しようとする努力だけでも、人間関係においては十分に価値があります。しかし、同時に相手が「自分とは異なる存在である」ことを受け入れること、「相手と完全に一致しなければならない」という考えを手放すことが、本当に相手と理解しあい、共感しあえる関係の第一歩だととも、思うのです。

何度も言っていることですが、アトムの子どもたちは、本當によくケンカします。「私はこうしたかった」「オレはこれが嫌だつた」と激しく表現するけんかの結末は、必ずしも意見が一致し解決するとは限りません。それでも、お互い正直にちゃんとさらけ出し合った後は、不思議とお互い気が済んだように、また普通に遊び始める子どもたちの姿に、仲直りは「同じになる」ことではなく、「違いを受け入れ、認める」ことなのだと、大人である私の方が教えられている気がします。

冒頭の父親懇談会での続きですが、ひとりのお父さんが「僕は、そんなときはショークリームかアイスを用意します。なんかわかんなくても、大変だったねって、甘いものの力を借りてみます」と言いました。そんなんいいのか？と怪訝な顔のお父さんが多かったのですが、実はその意見に「イイね」と賛同した女性陣が一番多かったことも、お伝えしておきますね。